

不登校の指導・援助のキーパーソンは教師

国際学院埼玉短期大学教授 金子 保

教育相談は子どもの悩みや困難の解決への指導・援助である。種々の悩みや困難に対して効果的な指導・援助が必要であるが、近年増加傾向にある不登校への指導・援助は効果的に機能しているとは言いがたい。

子どもの困難の解決への指導・援助として、各種の心理療法、カウンセリングなどが考えられている。特に、不登校に対しての指導・援助は、登校刺激を与えない、本人に生活のすべてをまかせるなど来談者中心法が学校、相談機関で主に行われていた。この方法が導入された昭和40年代には効果をあげていたが、近年、指導・援助の期間が大変長くなり、登校できないままに卒業期を迎えてしまう事例が多くなっており、学校への復帰に関しては、必ずしも望ましいものであるとは言えない。特に情緒混乱の型（「文部省の登校拒否分類」による）にその傾向が著しい。

現在、不登校の指導・援助には、行動療法、サイコドラマ的方法、社会的トレーニング（集団自然体験）、箱庭療法、指示的カウンセリングなど種々のものが利用されている。また、子どもは、保護者、級友、近所の友人、教師などに大きく影響される存在であること

から、生活があるがままにまかせるのではなく、子どもの心理を分析し、様々な人々の影響力を利用し、プログラム化するなどのシステム療法、家族療法の利用も研究され、効果をあげている。

今後、学校は子どもを引き寄せる力を高めるとともに、心の居場所づくりのために教育上の配慮をすることが必要である。また、家庭は子どもを学校に向けて押し出す力を増す努力が必要である。しかし、保護者は指導・援助の専門家ではない。したがって教師は、様々な指導・援助の在り方について研修し、子どもに社会的体験をさせたり学習を援助したりする方法で、登校できる力や心情を育ててやる必要がある。このようなことから適応指導学級も設置されている。また、悩みを持っている子どもに、ただ「相談に来いよ」と言っても、相互の信頼関係がなければ子どもは来ないものである。大切なことは、日常の接し方の工夫であり、カウンセリング・マインドをベースとした学級経営である。

今こそ教師には、子どもや保護者への指導・援助のキーパーソンとしての役割が求められている。

「学校に行きたくない」と思う児童の意識

—日常生活における児童の不安・緊張に視点を当てて—

広島市教育センター指導主事 三原裕隆
指導主事 中尾秀行

児童が不登校の状態にならないようにするためには、早期にその兆候を発見して適切に援助することが大切である。

この研究では、その兆候を探るために日常生活における児童の不安・緊張に視点を当て、「学校に行きたくない」という意識と不安・緊張との関係を考察する中で、不登校を未然に防ぐ援助について考えてみた。

1 不安・緊張とは

不安 将来の不幸・失敗・破局の予感

テストで悪い点をとって、保護者に叱られるのではないかという予感、この次には、本読みが自分にまわってきて読みまちがえて恥をかきそうだという予感などが不安である。

緊張 ほとんど注意集中の状態でありエネルギーが一方向に集中している状態

人前で発表するときや、試合のときなどに緊張することがある。適度な緊張は、学習や運動、仕事などを行うときには必要なものであるが、それも度を過ぎると人にストレスを与えることになる。

日常生活において、不安や緊張を感じることは誰もが経験することであるが、それが人の耐え得る限界を越えたり、長期に与えられたりしたときは、不適応行動を引き起こしやすくなる。

2 日常生活における児童の不安・緊張

児童の不安・緊張の場面を知るために、小

学校1, 3, 6年生(211人)の児童に対して、「あなたが不安になったり緊張したりするのはどんなときですか」という質問で自由に記述させた。結果は、学校生活に関する内容がほとんどであり、中でも、「発表するとき」「テストをするとき」など学習場面での記述が多い(表1)。やはり、学校生活は精神的な面で児童に大きな影響を与えている。

表1 不安になったり緊張したりする場面

(複数回答)

記述内容	記述数
発表するとき	76
テストをするとき	48
テストを返してもらうとき	24
遅刻したとき(しそうなとき)	25
リレーやかけっこ、体育の授業のとき	24
授業参観日のとき	23
学校の舞台上で発表するとき	24
忘れ物(宿題、提出物)をしたとき	19
習いごとの発表のとき	16
習いごとに行くとき	12
入学式、入学したとき	7
家にお客さんが来られたとき	5
友達がけがをしたとき	4
何か悪いことをしたとき	4
トイレに行きたくなくなったとき	4
学校へ行くとき	4

3 「学校に行きたくない」と思う児童の意識

小学校1～6年生(911人)の児童を対象とした意識調査から、登校はしているものの「学校に行きたくない」と思っている児童の意識を探ってみる。

図1は、「学校に行きたくない」と答えた児童(消極的登校群)と「学校に行きたくな

と思わない」と答えた児童（積極的登校群）の意識を比較したものである。

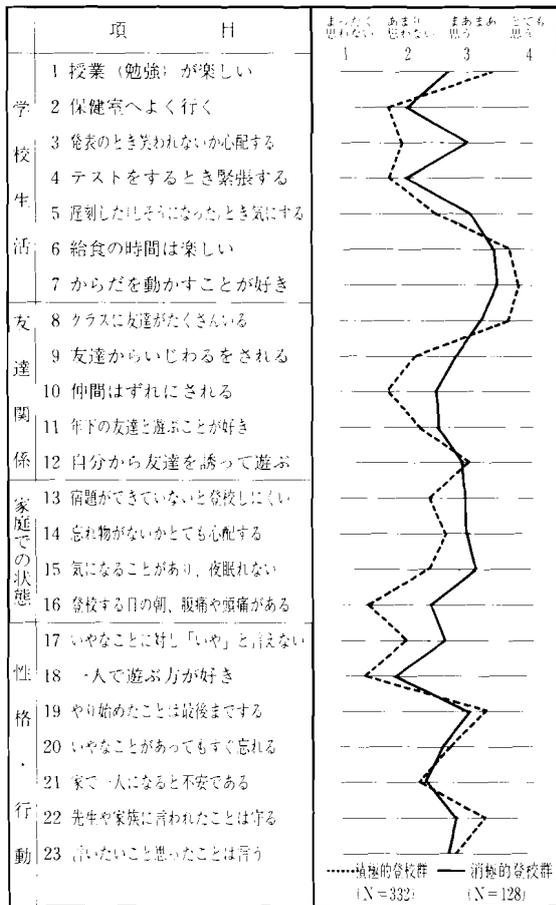


図1 積極的登校群と消極的登校群の意識

2群の比較から、消極的登校群の特徴をあげてみる。

消極的登校群の特徴

- ・授業(勉強)が楽しくない
- ・仲間はずれにされる
- ・友達からいじわるをされる
- ・登校する日の朝、腹痛や頭痛がある
- ・発表するとき笑われないかと心配する
- ・気になることがあり、夜眠れない
- ・一人で遊ぶ方が好き

これらは、不登校につながる前兆ととらえることもできるので、児童を観察する際のポイントとなる。「学校に行きたくない」という意識の背景には、学習や友達関係などに関する問題が存在している。

4 「学校に行きたくない」と思う児童の教師への意識

「先生は話をよく聞いてくれる」〔受容〕の項目で分かるように、消極的登校群は積極的登校群に比べて、受容されていないという意識をもっている(図2)。「学校に行きたくない」と思う児童に対しては、教師は受容的にかかわることが大切であると考えられる。

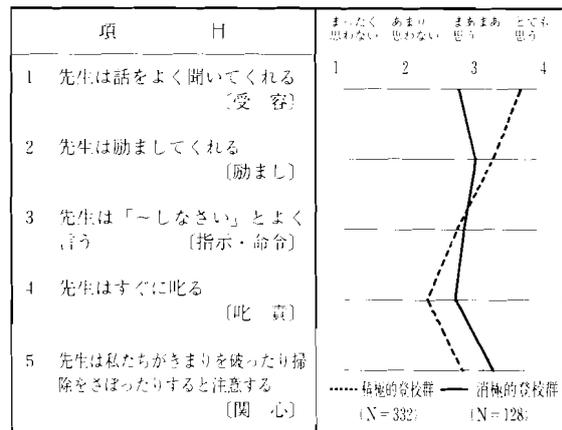


図2 教師への意識

5 終わりに

学校に行きたくないと思っている児童は、ほんのちょっとしたきっかけで登校できなくなることがある。不登校を未然に防ぐためには、次のようなことに留意する必要がある。

- 教師は、日々様々な角度から児童を観察し、不登校の兆候を見逃さないようにする。
- 教師が援助する際には、児童の話をじっくり聴き、気持ちを受け入れるような受容的な態度で接する。
- 児童の情緒の安定を図るために、児童相互の信頼関係づくりを重視した学級経営を行う。

これらの援助によって、児童は精神的に安定し、登校への意欲を高めるのではないだろうか。

単元のねらいにせまらせる表現活動

—生活科における表現活動を生かした学習指導の在り方に関する研究から—

広島市教育センター指導主事 木村正信

生活科における表現活動は、学習の中で実体験したことの様子や自分の考えなどを、言葉、絵、動作、劇化などで表現する学習活動である。この表現活動は、単元の指導過程での位置付けによって学習を動機付けたり、単元のねらいにせまらせたり、成就感を味わわせ自信を深めさせたりするなどの大切な役割をもっている。ここでは、「自分と自然とのかかわり」に関する単元例から、単元のねらいにせまらせる表現活動の方法や工夫について述べる。

1 指導計画と表現活動

表は、単元のねらいと指導計画である。単元のねらいにせまらせるために、4つの活動や体験と表現活動を指導計画の中に一体的に位置付けている。

表 指導計画

- 1: 単元名 「生き物広場を作ろう」
- 2: 対象 広島市立A小学校 第2学年1組男子14名女子21名計35名
- 3: 単元のねらい
身近にいる生き物を育てることを通して、それらの変化や成長の様子に関心をもたせ、生き物も自分たちと同じように生命をもち成長していることに気づき、大切にすることができるようになる。
- 4: 指導計画

次	活動や体験	表現活動	表現活動の役割
第1次	近くの川でカニを採取する	自己評価カードを書く	課題の明確化 活動への動機付け
第2次	カニと遊ぶ	観察カードを書く	学習の深化 ねらいにせまらせる
第3次	生き物発表会の準備をする	絵を描く、紙芝居を作るなど	新たな課題の発見 振り返り、確認
第4次	生き物発表会をする	発表する、絵日記を書く	学習としての定着 次の活動への意欲化

2 活動と表現活動の実際

第2次が単元のねらいにせまらせるための中心的な活動である。活動と表現活動の実際とその役割について

考えてみる。
カニと遊ぶ活動は、カニへの親しみを増し、愛着をもたせる



ものである。十分な時間を取り自由に遊ばせることが大切である。この指導では、十分にカニと遊ばせた後、「お医者さんになって、カニの健康診断をしよう」と呼びかけ、観察カード(図)を用いた表現活動に移っている。ここでの表現活動の役割は、実体験での各児童のカニの個性的な受け止めを一過性のものにとどめず意識化させることである。そのため、発見したことや感じたことを自由に表現できる「書く」活動が取り入れられている。

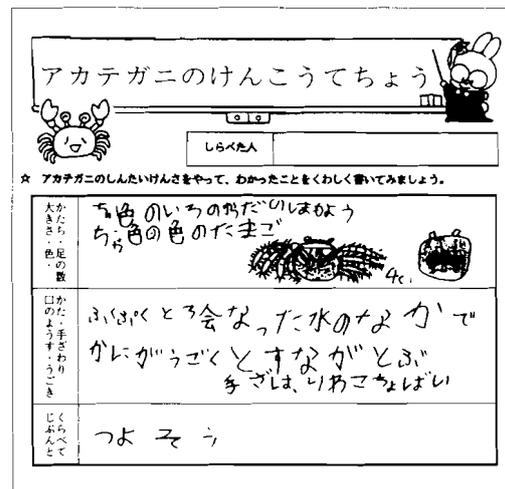


図 観察カード

カードの内容は、次の点で工夫されている。
①カード名によりカニを児童の生活にかかわった身近なものにしている。
②カニの特徴を五感を通してとらえさせる項目を設けている。
③自分とカニとのかかわりを問いかけている。カードの記述より、児童がカニを細かく観察し、愛着や愛情をもってかかわっていることが分かる。

このように単元の中心となる実体験と一体となった表現活動を適切に指導計画に位置付け、内容を工夫することで、単元のねらいにせまらせることができる。

平成5年広島市教育センター研究紀要第13号から

教育実践基礎講座 (10)

教材・教具の開発と活用

—理科の学習指導を通して—

広島市教育センター指導主事 松浦俊雄

教師自らが開発した教材・教具を授業に用いることによって、生徒の学習内容に対する興味や関心を高めることができます。これはまた、生徒に学習内容をより深く理解させることにもつながります。

では、教材・教具を開発し活用するためにはどのようなことに留意すればよいのでしょうか。そのポイントを教材・教具の開発の手順にそって考えてみることにします。

指導目標を明確にする

教材・教具を開発するうえで何よりも大切なことは、教師自らが指導する内容について明確な目標をもつことです。指導すべき目標がはっきりとしていなければ、どのような教材・教具が必要であるのかを考えることはできませんし、不必要な教材・教具を無理に学習指導の中に持ち込んで、生徒に無用の混乱を与えることにもなりかねません。教師には何よりもまず、指導目標を明確にすることが求められます。

指導過程を検討する

指導目標を達成するためには、どのような知識・技能が必要とされ、それらがどのように関連し合っているのか、教科書で取り上げられている観察や実験のねらいはどのようなもので、指導方法はどのようにしたらよいのかなどについて検討します。このとき、年間指導計画で設定されている授業時数を十分考慮することが大切です。

学習における「しきい」を見出す

理科では、日常生活の常識が通用しないことを扱うことがよくあります。あるいは、自然の事物・現象を数量的に取り扱うことが必要になることもあります。指導過程を検討すると、そのような生徒にとって学習のつまず

きの原因となる「しきい」とよべるものが見えてきます。この「しきい」をどのようにしたら解消できるかを考えることが、教材・教具の具体化につながります。

教材・教具を具体化する

以上述べたことを通して、生徒にとってどのような教材・教具が本当に必要なかが明らかになってきます。すると、身の回りにある教材・教具が学習指導に生かせるものかどうかも分かってきます。そのままでは十分に活用できないとなれば、何らかの工夫・改善を加えることとなります。このような小さな工夫・改善を積み重ねることが、指導目標を踏まえた新たな教材・教具の開発につながります。その際、できるだけ身近な材料を使い、単純な機構で、大型なものから始めるとよいでしょう。

さらに、開発された教材・教具は必ず授業実践によってその有効性が検証されることが必要です。

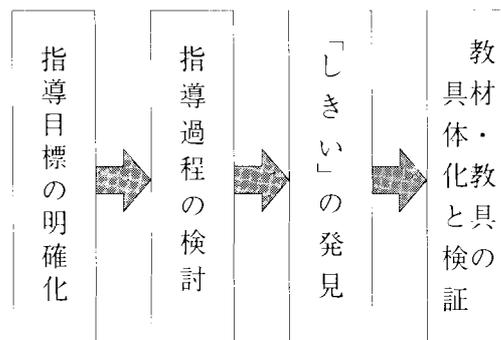


図 教材・教具の開発の基本的手順

これからの学習指導では、生徒の個性や能力に対応したきめ細かな学習指導が必要とされます。これを実現するための教材・教具の開発も、今後ますます重要となってきます。

教育センターひろば

平成5年度研究協力員

教育センターでは教育研究を進めるに当たって、次の先生方に研究協力員をお願いしています。

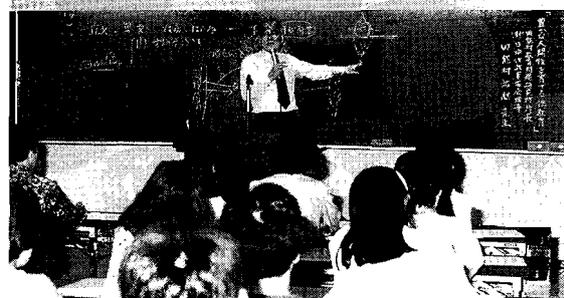
平成5年度研究協力員

研究領域	研究協力員氏名	所属校(園)名
社会科教育	平野政英 蒲生篤夫	原小学校 伴小学校
算数科教育	斉藤正信 長谷哲郎	東淨小学校 楠那小学校
音楽科教育	井山坂雅浩 山崎教子	吉島東小学校 南観音小学校
技術・家庭科教育	荻野野也 長谷川洋	中広中学校 井口中学校
幼稚園教育	田岡真貴 財満山恵子 友田圭子	基町幼稚園 長東幼稚園 井口小学校
障害児教育	岸藤康成 三菜千秋 三島裕充 三島智恵子	可部南小学校 大州中学校 山田中学校 安西小学校 原小学校
学習指導 (ティーム ティーチング)	長原和子 浜西文子 高谷貞実 長谷部貞隆 斎藤藤本敏幸	本川小学校 宇品東小学校 山本小学校 真亀小学校 山田東小学校 日浦小学校
学習指導 (環境教育)	澤原麻里子 野村裕利 海八浦松子 八瀧林典政 殿垣内和 松田和	温品中学校 翠町中学校 己斐上中学校 井口台中学校 伴中学校 長東中学校 落合中学校 清和中学校

- *障害児教育：鶴野里美教諭（長東小）
研修題目：自閉的傾向のある児童の衝動的行動の減少を図る指導に関する研究
- *美術科教育：今田克則教諭（段原中）
研修題目：主体的な鑑賞を導き出すための地域教材の開発
- *技術・家庭科教育：西村孝幸教諭（落合中）
研修題目：技術・家庭科における課題解決型の題材の開発に関する研究
- *教育相談：中司博之教諭（高陽中）
研修題目：生徒の自己理解の深化を図る開発的教育相談
- *英語科教育：住田恒三教諭（安佐北高）
研修題目：オーラル・コミュニケーションBの学習指導への一考察

研修講座スタッフ

性教育講座（豊かな人間性を育てる性教育）



題字 広島市立長東小学校校長 佐藤 陽祐
表紙絵 広島市立福木中学校教頭 濱田 昭法

教員特別研修生

今年度後期は次の先生方が、それぞれの専門分野で研修を進めておられます。

- *生活科教育：富村ひとみ教諭（長東西小）
研修題目：身近な社会とのかかわりを深める生活科学習指導法の研究
- *道徳教育：三吉勝彦教諭（安東小）
研修題目：よりよく生きようとする意欲を高める道徳の時間の指導に関する研究

編集後記

年内も余日が少なくなり、あわただしくなっていました。

今回は、平成4年度の教育センターの研究を中心に取り上げました。指導の充実にご活用ください。